

第6波妊婦感染相次ぐ

千葉の病院「昨夏の3~5倍」

新型コロナウイルスに感染する妊婦が増えてる。

昨夏の「第5波」では、千葉県で感染した妊婦の受け入れ先が見つからず、自宅で出産して新生児が死亡した問題があった。感染妊婦の出産に対応できる医療機関は限られていて、かかりつけ医との連携や、ベッドのやり繕りが課題となる。

千葉市の千葉大学病院で

は、1月16日からの12日間で、感染中の妊婦7人が出産した。昨夏の第5波では2ヶ月で5人だったといい、岡本曉子助教（生殖医学）は「第6波の方が断然多い。3倍から5倍くらいの印象だ。家庭で感染する人が多いのではないか」と話す。県全体でも、昨夏の



新型コロナに感染した妊婦が出産した赤ちゃんにミルクを与える助産師=1月、千葉大学病院提供

感染妊婦は2カ月で約10人だったが、第6波は1ヶ月だけで約80人に上っている。オミクロン株の拡大で、妊婦の感染急増は全国的な傾向とみられる。

千葉大学病院では、母体胎児集中治療室の全6床のうち4床で、感染した妊婦や新生児を受け入れている。妊婦のかかりつけ医などが対応している。

感染した妊婦は、体調の変化やスタッフの感染対策のため、帝王切開手術による出産となる。計画的に出産してもらい、ベッドを確保するという意味合いも大きい。生水真紀夫教授は

「どちら「妊婦が感染したのに対応してほしい」「どう対応すればいいか」といった相談が連日ある」という。感染した妊婦は、体調の変化やスタッフの感染対策のため、帝王切開手術による出産となる。計画的に出産してもらい、ベッドを確保するという意味合いも大きい。生水真紀夫教授は

「まだ第6波のピークが見えない。入院の需要が一気に増え、ベッドを回転させること」が一番大変になつてること」と話す。東京都内の大学病院でも感染妊婦の出産が相次ぐ。医師の一人は「医師や看護師らに感染者や濃厚接触者

が出て要員不足が深刻になっているのに、都は『感染した妊婦のための病床数を確保して欲しい』の一言張り」と話す。ほかの病院の医師は「ほどの病院の医師が高次の医療機関と密にコミュニケーションをとりながら、体調は強い。

川崎市の聖マリアンナ医師が急増したい、同じ対応をとる予定だ」と話す。

自宅療養呼吸や心拍数に注意

新型コロナをめぐっては昨年8月、妊娠29週の女性が自宅で出産し、新生児が亡くなった事案が千葉県で

あつた。臨症で自宅療養中に急な体調の変化を感じ、受け入れ先を探したが、9月の医療機関に断られた。

この問題を受け、各都道府県は感染した妊婦の受け入れ施設や、早産などの緊急対応ができる施設を改めて確認している。ただ、受け入れる数には限りがあり、感染妊婦が急激に増え状況では、医療機関が十

分に対応できるのか、懸念されている。

日本産科婦人科学会（日本産婦）が新型コロナ対策を担当川名敬・日本大学教授

は、「コロナ病床が逼迫しているおり、無症状や軽症の妊婦の自宅療養も増えてきている」と話す。日本大学板橋病院では、第6波に入つて感染した妊婦に重症例は報告されておらず、ほとんどが軽症だといふ。自宅で療養する妊婦が自身の体調の変化にいち早く気づき、

一ターや使って血中の酸素飽和度が92%以下になったりすれば、すぐに救急車を

呼ぶ。

川名さんは「かかりつけ医に早めに連絡をしてほしい。かかりつけ医が高次の医療機関と密にコミュニケーションをとりながら、体

調療養時の対応がスムーズになる」と話す。

出産後の対応も通常と異なる。千葉大学病院の場合、母体胎児集中治療室で一時のコロナ病床へ移動する。赤ちゃんは、出生後48時間以内に検査で2度陰性を確認した後で、かかりつけ医の産婦人科に移す。チルタ株が流行した昨夏までのデータでは、新型コロナに感染した場合、妊婦は中等症や重症になる割合が高かったといふ分析結果が出ている。妊婦は子宮が大きくなると、横隔膜が上がり呼吸がしづらくなる。このため、「コロナ感染で」気管支炎が悪化する感覚もある。

妊婦は子宮が大きくなると、横隔膜が上がり呼吸がしづらくなる。このため、「コロナ感染で」気管支炎が悪化する感覚もある。洋美